

戦後出発期の児童雑誌に現れた東アジア

西山利佳

〔キーワード〕子ども、戦後、雑誌、東アジア、児童文学

はじめに

二〇一九年の夏、政策による日韓関係の悪化は民間に「嫌韓」感情やヘイト言動をたきつける結果となっている^①。その様相は醜悪といえるほどだが、もちろん民間のさまざまな個人や団体が、アジア・太平洋戦争で、日本が多大な被害を与えたアジア諸国・諸地域の人々との交流を積み重ねてきている。子どもの本の世界の「日中韓平和絵本」のプロジェクト^②は、そのすぐれた一例だろう。

児童文学や児童雑誌など子どもたちに向けて発信されるメディアは、過去や現状を分かりやすく説明するという意図と、よりよい未来の構築を託す願いが込められる場合が少なくない。特に、戦後次々と創刊され「良心的児童雑誌」といわれた雑誌群は、敗戦後、民主主義の国日本を新しく作っていく主体として、子どもたちにむけて熱い期待をストレートに展開した。ここでは、東アジア地域^③はどのように語られているだろうか。

そこで、「良心的児童雑誌」の代表的三誌、『子供の広場』『赤とんぼ』『銀河』を創刊から最終巻まで通観し、東アジア地域に関する

る記事をピックアップし分析していきたい。第一章では、調査対象とした三誌の概要と「世界」へのまなざしを述べ、第二章で関連記事を追い、第三章で考察していく。戦後初期、おとなたちが子どもに向けてどのように東アジア諸国を語っていたのか、それらの言説から、今を考える視点をさぐりたい。なお、引用は人名以外の旧漢字を新字に改める。

第一章 調査対象とする雑誌について

第一節 『子供の広場』

『子供の広場』は、一九四六年四月、小学校高学年から中学生向けに創刊された児童雑誌である。月刊がままならず合併号も多く、一九五〇年三月の最終号まで、全三九冊発行された。一九四八年一月より『少年少女の広場』と改題している。発行所は教育雑誌『教育生活』や、児童文学者協会（現日本児童文学者協会）の機関誌『日本児童文学』（第一次）を発行し、一時は児童文学者協会の事務所も兼ねていた新世界社である。創刊時の編集同人は、大久保正太郎、関英雄、菅忠道、滝沢不二男、来栖良夫、松山文雄。菅忠道

によると「新世界社は戦後の児童文化・文学運動の一拠点の観があり、大久保・菅は意識的にそれを推し進めたのであった」という。戦時中の統制が解かれ、多数復刊、創刊された児童雑誌の中でも、民主日本建設のための運動意識が色濃く出ている子ども向け総合雑誌である。幼年・低学年向きの『こどものはた』（四九年一〇月より『こどものとも』と改題）、中学年向きとして、『子どもの村』も発行しており、変遷はあるもののその編集内容を見れば、非常に力の入った取り組みであったことがわかる。

「創刊の言葉」を引用する。

「子供の広場」は諸君の広場だ。諸君が自由に集つて、勉強し、議論をたたかへせ、計画をたて、実行を進める楽しい広場だ。ほんたうのことをまなび、物事を根本から考へる力をねり、文化を、平和を、人類を愛する心をきたへる明るい広場だ。全日本の少年少女諸君、子供は子供で、しつかり腕をくまう。さうして、どんな困難でも乗り越きつて、文化の国、平和の国、民主日本をつくりあげよう。

この「創刊の言葉」と呼応する「あとがき」では「日本がまちがつた戦争をしてゐることを、だれも諸君に知らせなかつた。知らせることができなかつた。」けれど、「「広場」は諸君に、なんでもほんたうのことを、をしへる。」と書き、「世界は一つに」と題した国際連合のはなしを冒頭に掲載する。執筆者は「社会運動家」松本慎一である。

第二節 『赤とんぼ』

『赤とんぼ』も『子供の広場』同様一九四六年四月に創刊された。一九四八年一〇月の最終号まで、全三一冊が発行されている。戦時中中央公論社の編集者で、戦後は詩人、研究者として児童文学界の重鎮の一人であった藤田圭雄が編集長となり、その尽力で竹山道雄の「ビルマの竖琴」の初出誌となったことでも有名な児童雑誌である。

藤田は「赤とんぼ会」として大佛次郎、川端康成、岸田國士、豊島與志雄、野上彌生子の名を連ね「大正の頃鈴木三重吉氏によつて主唱された赤い鳥の運動をわれわれはまだ昨日のことのやうに覚えてゐる。われわれの今度の仕事を通じて子供の世界にもう一度輝かしい文芸復興の時が将来されたならその喜びは限りない。」と創刊号のページに掲げ、児童文芸雑誌として編集している。

創刊の言葉は次のように書き起こされている。

子供たちの世界をいつも美しい豊かな読物でいつぱいにしておきたい——それはわれわれの常に抱きつづけて来た強い願望であつた。しかしそれも永い戦争と暗黒政治の間には、こと毎に妨害され圧迫されつづけて来た。（略）どん底に落ちた日本を美と力に満ちた国に作り上げて行かねばならぬ今の子供たちに、どちらへもかたよらぬ豊かな情操を養ひ、暖い心と正しい判断力を持った人間にするやうに、あらゆる努力を傾倒したいと思つてゐる。

敗戦という事実の上に立ち、これからの日本を創っていく子どもという子どもも観は『子供の広場』に通じるものであるが、戦中を「暗黒政治」といい、未来像を「美と力に満ちた国」という表現で語る『赤とんぼ』と、「民主日本をつくりあげよう」と高らかに呼びかける『子供の広場』では、政治信条に違いがあることは明らかである。とはいえ、例えば一九四七年一月号（二巻一号）の編集後記にあたる「皆さんとお話する頁」の中で、藤田は次のように書いている。

いずれ、選挙だとか憲法だとか組合運動だとか農村問題だとか思想問題だとか——いろいろのむつかしいことが諸君の前にあらわれて来ます。その時諸君がしつかりとした基礎になることを知つていれば、他人にごまかされたりさそわれたりしないで、立派にそれに向つて行けます。いい本を沢山お読み下さい。（略）今年には「こども朝日」「子供の広場」「銀河」「少国民世界 フレンド」「少国民の友」「少年クラブ」「真理の国」「動く実験室」その他各少国民雑誌それぞれが特徴を発揮して、いい雑誌になつて行くでしょう。

文芸や綴り方に力を入れていた『赤とんぼ』であっても、戦後出版期という同じ時代の空気の中にあつたことがよくわかる。当然、社会情勢を解説する記事や、東アジアを舞台とする創作作品も掲載されているので、それらを次章で拾っていくことにする。

第三節 『銀河』

『銀河』は、前二誌に半年遅れ一九四六年一〇月に創刊される。四七年八・九月のみ合併号で、四九年八月号まで全三四冊、新潮社から刊行された。創刊号から四七年六月号まで横組み⁶⁾という目立つた外形的特徴を持っていた。長谷川潮は『日本児童文学大事典』の『銀河』の解説で編集責任者の山本有三が四頁にわたって記した創刊の辞「『銀河』のはじめに」を紹介したのち次のように述べている⁷⁾。

偏狭な軍国主義や全体主義の否定、文化国家建設への意欲という点で、創刊の辞における有三の主張は、当時の一般的思潮とほぼ共通している。また、ほかの〈良心的児童雑誌〉の理念とも重なるが、しかし、理想主義を根底とする教養主義・科学的合理主義を強く押し出しているところに「銀河」の独自性があり、これは「日本少国民文庫」の基本的性格につながっている。『銀河』のこういう性格は、生理的に優れているという理由での左横組みの採用にも現れているが、ほかに、有三が国語改革の中心的推進者だったこともあつて振り仮名を全廃し、それとの関連と推定されるが、創作を含めて文中の固有名詞や執筆者名をカタカナで表記したり、文部省の制定に先立って、四七年一月号から現代かなづかいを用いたりもした。

件の「『銀河』のはじめに」は、星や宇宙のスケールの大きさを

語り「皆さんの気もちを、大きく、ゆったりしたものにしたいと思ったので、この名まへを選んだのです。」と結んでいる。そのほとんどが星や銀河の話なのだが、次のようなくだりがある。

今日の人は、心がまへが大きくなってはいけません。現に今度、日本が負けたのも、それを持つてゐなかつたからです。なんでも日本、日本と、日本だけが特別の国でもあるやうに考へて、世界全体を見わたすことを忘れてゐたからです。さういうちっぽけな考へでは、とてもこれからは立つてゆけません。

日本は戦争に負けました。戦争に負けた結果、カラフトや台湾をかへしました。朝鮮は独立しました。ちひさな日本は、いよいよちひさな国になりました。しかし、それがなんでせう。大宇宙から見たら、地球全体は一つぶの砂にしか過ぎないのでありませんか。その一つぶの砂の上で、どこを取ったの、取られたのと争ふことは、一体なんの意義があるのでせう。

言わんとしていることはわかるが、現時点で、しかも敗戦直後の東アジア観を探るという意図で読むと、視野が大きすぎて隣国に目が行っていないことに驚く。そして、「銀河」の山本有三に限らず、戦後の「良心的児童雑誌」群が熱く語りかけた「子ども」には、ついこの間まで「日本人」を強いられていた朝鮮や台湾の子どもは含まれていないのではないかというふうに思い至る。

第二章 三誌に現れた東アジア

第一節 『子供の広場』『少年少女の広場』の場合

『子供の広場』（『少年少女の広場』）には、以下一種の記事を認めた。掲載順に執筆者・本文タイトル・掲載巻号（発行年月）と簡単な内容を列記する。（第二節、第三節も同様。）

1、太田曄子「中国のお友達」 一卷一号（一九四六年四月）

「私たちの中には、中国と聞いて、「何だ、支那か。」といふ気持ちを持つ人はゐないでせうか。」と始まるこの記事は、筆者が上海で中国人の子どもたちに日本語を教えた日々の「楽しかつた」思い出を綴り、以下のように結んでいる。

（終戦となり）今はじめて私たちは、長い間、中国を、中国人をどんなに苦しめつづけてきたかがわかるやうになりました。しかし、「中国は日本に決して報復をくはだてるものではない。人類は東西の別なく、密接に結合し、一家の兄弟以上にならなければいけない」といふ終戦直後の蒋介石のことはや、中国の小さなお友だちが私に示してくれた数々の心やりを思ふとき、何か希望がわいてくるのを感じます。今こそ私たちはまじりけのない広いまなこを世界に向け、世界のお友だち、ことにおとなりの国、中国のお友だちの姿を見ようではありませんか。（略）私たちは、そのお友だちと仲よく手を取りあつて、

おたがひに愛しあひ、尊敬しあひ、りつばな東亜を、美し世界を作りあげようではありませんか。

この記事が、「世界は一つに」と題した国際連合を解説する記事に続いて掲載されていることから、作り手たちのスタンスがストリートに伝わってくる。

2、秋山良照「延安の子供」一巻二号（一九四六年五月）

毛沢東の政府がある延安の小学校の様子が紹介されているが、筆者がいつどのような立場で延安に滞在していたのか書かれていない。子どもたちがよく討論するとか、親兄弟のない子どもに「毛沢東とか、朱徳とか、林主席とか、政府の役人や、そのほか、軍人や、はじめによくはたらくので有名になったお百姓さんや、会社員、およびそのおくさんがた」が「おとうさんやおかあさんになつて、私たちをお世話してくださる」という施策が紹介されている。

3、本田喜代治「世界諸国の憲法」一巻五号（一九四六年一〇月）

憲法とは何かを説明した後、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、日本、ソヴィエト連邦に続き、中国の憲法について解説している。一六頁にも及ぶこの解説文は最後に、世界には他にも憲政を行っている国は多くあるが、「いまの日本のありさまをよりよく知るためのかぎとしてもこの七つで十分だとおもふ。」と述べ、以下のように続けている。

（略） いままで日本人は、世界にむかつて目をひらくことを、

とめられてゐた。井戸のなかのかはづのやうな、けちな島国こんじやうしかもたされず、世界の動きから目かくしをされ、侵略主義の戦争にかりたてられたのである。（略）

われわれは、政治の上でも、地理の上でも、文化の上でも、とくにわが国とふかいつながりのある三つの国として、アメリカと中国とソヴィエトに、いつそうするどい注意をむけなければならぬのであるが、そのためにも、諸君は、しつかりと世界主義と民主主義のどだいの上に立つてものを見、ものを考えることがだいじだ。（略）

4、山田憲一「中国のおもいで」二巻一号（一九四七年一月）

本文頁タイトル横に「おとなのレポート」とある。「戦に負けた捕虜の身でありながら、こんなに中国の人々はしんせつにしてくれました」という思い出の短いレポート。

5、謝冰心「私の幼ないころ」二巻三号（一九四七年六月）

「現代中国女流作家として高名」な謝冰心（マヤ）に「子供の広場」に寄稿してもらったエッセイ。波多野太郎訳だが、「読者のために編集部でわかりよくかきあらためたところがかなりあります」との断り書きがある。

6、のわき・ふさ「ふるさと」二巻六号（一九四七年九月）

朝鮮で生まれたみねという少女の目を通した、植民地下の朝鮮を描いた短編小説。今読み返しても心を打つ秀作である。次章で詳述する。

7、さねとう・けいしゅう「中国と日本」二巻九号（一九四七年二月）

中国研究者実藤惠秀が日本における中国観のゆがみをわかりやすく批判的に分析した解説。六年生の国語の教科書（『国語 第六学年 上』一九四七年四月翻刻発行）に載っている「ホートン（＝小路 引用者注）風景」が北京の古い部分だけを紹介していることへの不満から書き起こし、「ばかないくさ」が始まった理由は「日本が、ながいこと、中国を、ばかにしたからだ」と述べ、その理由を、日清戦争後中国への敬意を失った「あさはかな、かたよった、もののかんがえかた」と、「中国のあたらしいことを、さっぱり研究しようとしなかったこと」の二点としている。

8、つづりかた「クツミガキをしながら」三巻九号（一九四八年九月）

川崎市の中学二年安藤雄一君と、小学五年生の弟安藤宜孝君の作文が、満州からの引き上げのときの様子と、引き揚げてからの生活についてそれぞれ二本ずつ収録されている。特に弟宜孝君の幼さゆえの率直な書きぶりが、引き上げ後身を寄せた親戚の家での確執などをストレートに伝え興味深い。

9、「世界ニュース 中国のインフレ」三巻一〇号（一九四八年一〇月）

「同 中国のインフレそのご」三巻一二号（一九四八年十二月）
見出し通りのちいさな記事である。

10、藤森成吉「少年すいこ伝」四巻一号（一九四九年一月）～四巻六号（一九四九年八月）

第六回にあたる四巻六号の本文末尾に「つづく」とあるが、翌号以降掲載は認められない。

11、中村正一郎「ぼく、こじきではありません」五巻二号（一九五〇年二月）

紹興の周家が傾き、親戚の家に預けられ心ない言葉を浴びせられるなど苦労した魯迅の少年時代の物語。一六才の魯迅が、父の臨終の枕元で日本へ行って学ぶことを誓う場面で終わり、下段に魯迅の写真と略歴が紹介されている。

第二節 『赤とんぼ』の場合

『赤とんぼ』全三冊中、東アジアが題材になっている記事は、言及も含めると以下の七本だった。

1、実藤惠秀「瘤仙人」一巻四号（一九四六年七月）

中国研究者として著名な実藤惠秀による、中国の民話の再話と見られる。山東省即墨の金持ちが仙人になりたがって失敗するというユーモラスな読み物。

2、あしながおじさん「正しい国・明い国」一巻六号（一九四六年九月号）

これは、時事コラムのようなコーナーで、ペンネーム「小言幸兵

衛」(木内高音)が五回、「風の又三郎」(里見淳)が二回、そしてこの「あしながおじさん」(末松満)が四回、三人そろって一回登場している、そのうちの一回である。末松満は『週刊朝日』の編集長とのことで、毎回氷海子ちゃんと協助ちゃんという二人の子どもに語りかけるという趣向で書かれている。この回は民主主義について解いている。他も、選挙や憲法など、政治に関する内容となっている。

その中には「日本のけらいだった満州国は、日本が戦争に負けたためなくなった。」という下りが見られる。

3、濱田隼雄「この世のはじめ―高砂族の伝説から―」一巻八号(一九四六年二月)

日本統治下台湾の小説家として活躍した濱田隼雄による、天から振ってきた石から三人の祖先が現れるところから語られる神話的物語。高砂族がどこの種族であるという説明はない。高砂族が台湾の先住民の一つであるということは、当時の読者にとっては言うまでもない常識の範囲だったのだろうか。

4、綴方 初三荒幡章「北支青島」二巻一号(一九四七年一月)

昭和十五年二月、五歳の時に青島に行き、青島日本第二国民学校へ入学したという荒幡君の青島での日々を綴った作文は次のように結ばれる。

支那のお友達は日本語もたいへん上手で、日本の歌をおぼえて、たのしそうに歌います。又僕達も日本語をおしえてやつた

り、支那語をおしえてもらったりします。ほんとうに支那のお友達はやさしいよいお友達です。僕は大きくなったら今一度青島に行つて見たいと思います。(立川市柴崎国民学校・堀山欽哉指導)

選者の川端康成は「三年生としては非常に言葉の力が進んでいる珍しい例でしょう。」と評価し、「国民学校の国語教育は低過ぎはしないでしょうか。」と持論を展開している。

5、綴方 初五笛木敏子「満州にいた時」二巻三号(一九四七年三月)

ソヴィエトとの国境の町鶴立県という町にいたという笛木さんが、日本に引き上げるまでの一年ほどの間の出来事を綴った長文の作文である。「県公署」という役所に勤めていた父が敗戦前年の五月に入隊して吉林で従軍していた。敗戦の年の「八月の或日」姉と二人でその吉林の父に面会に行き、その帰りに「これから鶴立に帰ろうたつて、お母さんどころか、日本人は一人もいないですよ」という事態に直面する。母との再会、幼い妹たち三人が次々と亡くなったことなど、「大きい事件、長い月日を扱っています。子供の綴方には荷が重過ぎる材料でしょう。(略)悲しいことを書きながら暗くはありません。一つの記念になる作品でしょう。」と川端康成は評している。ソヴィエト侵攻以降の満州の混乱ぶりが垣間見られる証言と言えるだろう。

6、百田宗治「南京のうchw」二巻七号(一九四七年七月)

昭和一九年夏の初めから一二月中頃まで、派遣軍の総司令部嘱託として中国に行っていたという百田の、漢口の思い出を綴ったエッセイである。

7、宮津博「黄土」三卷三号（一九四八年三月）

「NHKが文部省と相談して、わが国の新しい教育に役立つように企画した学校放送のプログラムの中の一つ」で「黄土」はその第一回として九月十九日に放送されたものです。諸君の社会科の勉強へのよい指針となると思います。」と末尾にある。「黄土」や「黄河」を擬人化して黄河流域の文化の発達を語らせたシナリオとなっている。

第三節 『銀河』の場合

『銀河』の記事の中で東アジアに関するものは、以下の二種である。

1、「世界少年少女ニュース」一卷二号（一九四六年一月）中の「☆人力車がナクナル」。見開きページに八つのトピックが掲載されているそのうちの一つで、蒋介石が人力車を恥ずかしいと考えており、その考えに従って今後五年間で上海から人力車を全廃する、南京でも来年の秋までに無くすという計画が紹介されている。

同コーナーはその後も続くが東アジアの話題は見られない。四卷三号から最終号となった四卷八号まで、世界地図の絵の上に各地の話題を載せた「ひと目でわかる少年少女世界ニュース」（四卷六

号から「銀河 世界少年少女ニュース」が折り込みで入るようになる。そこに現れる東アジアは以下の通りである。

「☆中国の運命」四卷三号（一九四九年三月）蒋介石の国民政府軍と毛沢東の中国共産党軍の攻防を伝えている。

「☆中国の内戦」四卷四号（一九四九年四月）蒋介石が「一月二十一日引退を声明」、「中共がわははじめの八カ条のほかにつぎつぎに条件をつけ、二月五日には台湾、海南島をわたし、海軍も降伏せよと申しでている」等と伝えている。

四卷五号には、中国初め東アジアのトピックはなく、他も政治的な話題は見られない。

「☆成るか和平会議」四卷六号（一九四九年六月）四月一日に開かれた中国の国民政府側と中国共産党側が和平会議を開いたという記事。

「☆中共・南京に無血入城」四卷七号（一九四九年七月）「こうした中共軍の勢力は全アジアに大きな影響をあたえるだろう」と結ぶ。

「☆国民政府が地方政府に転落」四卷八号（一九四九年八月）「共産主義と反共産主義で世界が二つに別れているいま中国をめぐる情勢はいよいよ複雑になった」と結ぶ。

朝鮮半島情勢はまったく出てこなかった。

2、四卷七号から、岡本良雄による「黄浦江の流れ」という連載小説が始まるが、終刊に伴い第二回で未完のままになってしま⁹⁾う。

掲載されたのは次のような内容である。

昭和一八年、上海の日本人街の薬局の息子国夫が主人公である。

海に流したはずの「ドザエモン」が、四日も経ってから上げ潮に乗って黄浦江の流れを逆流して戻って来たらしい。それをきつかけに、初めて海を見たいという思いが生まれた国夫は、中国人の友だちリヤンと無断で汽船に乗り込み海を目指そうとするが発見される。ドザエモンを見つけてから心身の調子を崩し、「かわいいそうだ、かわいいそうだ」と謎のうわごとを言うようになった海軍兵曹の早川さんの謎を大枠として、国夫を日本へ帰そうと言いつつ母親に、「日本なんかへ、ぜったいに行かないよ」「いやだ、いやだ……。ぼくは日本人だよ。でも、ぼくは上海がすきなんだ。ぼくはリヤンがすきなんだ。」と泣きわめく国夫の姿で「未完」となってしまった。

回を重ねれば、早川兵曹に何があったのかというミステリーで引っ張りながら、国夫の家族の問題や冒険が絡んでいき、何のことわりもなく登場しているリヤンとの関わりで日本人の意識も映し出されていったことだろう。密航が見つかったとき、国夫が「きみは、だれですか。」とたずねられるのに対し、リヤンは「おまえは、なんだ。」とにらみ据えられる。(こういう図式的な技法は岡本良雄らしい。) 日本兵たちの高圧的で手荒な荷物調べの様子も目の当たりにする。連載が続いていけば、日本兵や日本人が当時の上海でどのように振る舞ったか、様々な場面が書き込まれたことだろう。

第三章 見えていたものの限界

第二章に列記した記事を眺めて、朝鮮半島情勢に言及がなく、朝鮮を舞台とした短編一作以外の記事が探せなかったことに驚いている。つまり、本論の調査対象として探そうとしていた記事のほ

とんどが中国に関するものであったわけである。それらの記事が持つ傾向と、戦争責任の意識について、考えたい。なお、各記事の掲載情報については、前章で列記した際の数字を使い、『子供の広場』(『少年少女の広場』) 掲載記事は(広〇)、「赤とんぼ」のそれは(赤〇)、「銀河」は(銀〇)という形で示すこととする。

第一節 中国への視線

前章に挙げたように三誌の中で該当記事が多岐にわたったのは『子供の広場』(『少年少女の広場』)である。しかし、雑誌毎に大きく傾向が違っているとは読めなかったので合わせて分析していく。

まず、「中国のお友達」(広1)は前章でも引用したように、「中国と聞いて「何だ、支那か。」といふ気持を持つ人はゐないでせうか」という問いかけに始まり、「私たちは中国を知る前に、まづ、私たちが祖国を愛すると同じやうに祖国を熱愛する中国の人たち、ことに中国の若いお友だちのことを忘れてはなりません。」と説き、「私の見た上海のお友だちの学校生活」から、「中国のお友だちの生活の一片をお伝えしたいと思ひます」と展開する。そして、占領下の上海で日本語教師として教壇に立つた筆者を慕ってくれた「きれいなひとみや、美しいまごころを持つ子供たちと私の愛する弟や妹たちがどうにかして結ばれてほしい」という強い思いを紡いでいる。「延安の子供」(広2)は、「私は、戦争のなかから生まれ、戦争のなかでそだてられた、ゆうかんで、正直で、けんそんな中国の子供をたくさん見ました。」と結ばれる。中国のこんな素敵な子どもたちの姿を知って欲しいというスタンスは共通している。また

「南京のうちわ」(赤6)は、思い出のうちわを軸に漢口の夜も眠れぬような暑さを中心にエキゾチックな風物が描写され興味深い旅行記のようなものになっている。

これらは戦争中(「延安の子供」は、戦中戦後)の中国の様子を伝えながら、戦争のネガティブな描写はない。日本の子どもたちにも中国への親しみを持って欲しい、仲良く手を取り合って欲しいという思いから「美しいまごころを持つ子供」「ゆうかんで、正直で、けんそんな中国の子供」を懸命に紹介しているのだろう。しかし、このことは、日本の戦争責任を追及する被害者の怒りや恨みの表情を隠ぺいする。

また、「戦に負けた捕虜の身でありながら、こんなに中国の人々はしんせつにしてくれました」と綴る「おとなのレポート 中国のおもいで」(広4)も、同様の効果を持つ記事と考えて良いだろう。中国の紹介は直接的な、出会った人々の紹介だけではない。「謝冰心 私の幼ないころ」(広5)と、「中国の作家魯迅の少年時代 ぼく、こじきではありません」(広11)が中国の作家の子ども時代をとりあげることによって、中国文学への関心を育む記事となっている。

また、「瘤仙人」(赤1)、「この世のはじめ―高砂族の伝説から」(赤3)、「少年すいこ伝」(広10)は、民話や伝説、古典から中国(台湾)への関心の窓を開く記事と言える。

ここで実藤恵秀の「中国と日本」(広7)の批評を照らし合わせて考える。「昭和12ねん、ロコキーヨーではじまった」「ばかないくさ」の原因を中国に対する差別意識と、中国の変化を知ろうとしたかった二点と分析して具体的に解いた実藤は、小学六年の「国語」

の教科書の「ホートン風景」を「ものたらくおもう」と批判することからこの評論を書き起こしているのだった。「ペキン」という呼び名は日本人が戦争中に勝手にそう読んだのであって、いまや「ベイピン」とすべきなのだと苦言を呈し、「それは、まあ、よいとしても」と「ホートン風景」の描き出す様子が古めかしいことを批判している。

ベイピンのホートンには、国語の本にかかっているような、ふるいところもみられはするが、日本とおなじ、あたらしいところも、あるのだ。

「ばかないくさ」の原因二つともに内在させているような「ホートン風景」への批判は、今もって古びることなく有効な指摘と感じる。親しみを込めていてもそのノスタルジックなイメージは、対象を一段低く見る意識と紙一重であり、現在進行形の変化への無関心に支えられている。先に挙げた「中国のお友達」や「延安の子供」「南京のうちわ」のノスタルジックな視線は、実藤のひっかかった「ホートン風景」と通底するセンスでできてはいしないだろうか。

もちろん、雑誌としては現在進行形の時事ニュース的コーナーを持っていた。「世界少年少女ニュース」(銀1)は、蒋介石と毛沢東の主導権争いの行方を追うもので、「世界ニュース」(広9)に登場するのは中国のインフレ記事であるが、いずれもごく短いもので、ちよつとした話題以上の内容ではない。

「世界諸国の憲法」(広3)では、目下過渡期で現行憲法は「中華民国訓政時期約法」で、「これにたいして、つぎの憲政がしかれる

時期にそなへて相談ちゅうの新憲法草案があら、それは孫文の三民主義を根本精神とするとし、三民主義の説明を続けている。「黄土」(赤土)は、地理的な内容が擬人化によるシナリオで伝えられる。これらは、中国を日本人が懐かしく振り返る中国像とは違う角度からのアプローチとなり興味深くはある。しかし、現時点で学ぶところの多いものと感じたのは実藤の評論であつた。

第二節 戦争責任意識

朝鮮が取りあげられた唯一の短編作品「ふるさと」(広6)は、今でも読みごたえのある秀作である。

作品は「みねは朝鮮でうまれました。」と始まる。オンドルの描写、オンドルを焚くパンヨンとのほほえましいやりとり、桃のピンク色、れんぎょうの黄色、梨やゆすらうめの白が鮮やかな春の風景。ヤンバンのお墓のあとの芝すべりなど、みねの生活を包む空気が優しく丁寧に綴られている。また、つぎのような描写からは幼いみねの感性が生きて伝わってくる。丘の片隅に穴を掘って暮らしているオンボに、子どもたちは寄りつかないようにしていたのに、あるとき一人で遊んでいたみねは「ふとオンボのすみかがのぞきたくな」る。めずらしくニコニコと朝鮮語で話しかけるオンボに穴の中へ招かれると、入り口の狭い土間にキムチのツボが三つ四つ並んでいる。それを見てみねは次のように考える。

朝鮮人たちは、冬のたくわえに、キミチという白菜のつけものを、いくつぽもつくっておくのです。それは、おさかなや、

にんにくをきりこんで、赤いとうがらしをたっぷり入れた、なかなかぜいたくなつけものでした。ヤンバンの家には、そのつぽがなん十もならんでいるという話でした。

みねは、オンボもひとりでこれだけキミチをもっているのだから、こじきじゃないと思って、なんだか安心したような気持ちになりました。それに、そこはさっぱりとかたづいていました。

みねという少女の思考をみごとにとらえている場面だ。このような描写に支えられているので、日本人のおとなたちが「ただのよう」に「と言うほど安くなるまくわうりを食べられない子どもたちの存在も、ごく自然にみねの目を通して描き出される。

ある寒い日、みねはたくさん朝鮮人達の行進にでくわす。「ちょうど、みねの前で、列のなかの一人のわかいむすめが白いうわぎのふところから、まっかな旗をさっとだしてふり」「ひきさくような声で、なにかさけ」ぶと、警官がとびかかり殴りつける。その一連の場面から星印でくぎり、この作品は次のように閉じていく。

それは一九一九年三月一日のことでした。みねは、ずっとあとになって、その日のさわぎのほんとうのわけを知りました。朝鮮の人たちは、日本にとりあげられたじぶんたちの自由のために、たたかったのです。

それから二十六年もたって、日本が太平洋戦争にまけた日に、朝鮮の人々にも、はじめて自由な日がきました。(略)あのわかいむすめさんは、まだ生きているでしょうか。生きてこ

のよろこびにあうことができたでしょうか。

大きくなるにつれて、みねは、じぶんのおさない記憶にのこっている、いろいろなことのほんとうの意味がわかってきました。(略) なぜみねたち日本人は、一人のこらず学校にかよっていたのに、あの子どもたちは、ほろをきて、あかにまみれて、まくわりの皮をひろってたべていたのでしょうか。

みねは、じぶんとおなじように、みんなにもそのわけがわかってもらいたいとおもいました。そして、みねにとってなつかしい、生まれこきような朝鮮の人たちと、もう一どほんとうになかよくなりたいとおもうのでした。

この作品は当時も評価が高かったようで、各雑誌の一九四七年四月号から一二月号に掲載された高学年向きの童話から青少年文化懇話会が「文学的にも教育的にも意義があるもの」を選んで一六篇の佳作を収めた童話集『白い塔』(東西社、一九四八年九月)に収録されている。また、『少年少女日本歴史小説集』(アルス、一九五三年一二月)にも再録されている。

みねという少女のリアリティを通して、日本の朝鮮支配が深い悔いとして静かに告発されている。朝鮮という題材が希有な作品というばかりでなく、植民地の問題が作品に昇華されている点を評価してよい作品だろう。

対して、先に挙げたノスタルジックに中国で出会った人々(子ども)を紹介する作品はどうだったか。「中国のお友達」(広1)では、「上海では戦争のために、たくさん学校の破壊されました」と書かれていた。「延安の子供」(広2)では、「戦争は、中国の少

年少女たちの愛する父や母や兄を、たくさん殺しました。」とある。「戦争」の一言で表してしまふことで、責任の主体は顔を現わさない。

また、「南京のうちわ」(赤6)では、「まだ戦争中でしたから、私は当時の日本の大本営の命令で出かけたのです」「中国の子供たちのためにあたらしく絵入りの雑誌を出そうという計画ができて」などがある。なぜ、何のために日本人がそこにいたのかというところへの問い直しは感じられない。先の二本の筆者も同様だ。「外地」の生活や引き上げを書いた子どももの綴り方に、なぜそこで暮らしていたのかという問い直しをこの段階の子ども自身に期待するのは酷だろう。しかし、「ふるさと」に示された問い直しは雑誌の記事としてはできたことではないだろうか。過去を省みない未来志向の罪深さを感じないではいられない。

おわりに

敗戦からまもなく創刊された児童雑誌群には、新しい時代の担い手としての子どもたちに寄せる期待がストレートに表現されている。卒業論文、修士論文でこれらの雑誌に目を通した経験を持つ私は、平和、民主主義、文化国家といった理念がたりもなく言葉にされる誌面では、植民地や侵略戦争に対する自己批判の言葉も存在したように思い込んでしまっていた。今回、東アジアがどのような立場にあるかという、観点を絞った見直しでピックアップした記事は、予想外に少なかったというのが正直な印象である。特に、雑誌が発行されている時期に大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国がそれ

それに成立しているのに、朝鮮情勢への言及がないということは驚きである。さりげない端々にそれは紛れ込んでいたのか、見落としの不安にも襲われているが、見落としがあったとしても中国との扱いに圧倒的な差があるという事実に変わりは無い。なぜこのような違いが生じたのか、敗戦時日本に二〇〇万人以上もいて、翌年大半が自力で帰国したとはいえ、約六五万人も残ったという朝鮮人の存在がどこにも感じられないのはなぜか。その後の創作児童文学も同様で、あたりまえに存在するはずの在日朝鮮・韓国人が登場する作品は決して多くはない。その数少ない作品の中で人物がどのように描かれているのか。「ふるさと」に学んで言うならこういうことだ。

——親切でよい人たち、自分に好意的な人たちを通してプラスイメージを打ち出すことは、「日本にとりあげられたじぶんたちの自由のために、たたかった」人々の激しさから目を背けることになりかねないことに自覚的であるべきだろう。みねが願った「ほんとうになかよくな」るために、私たちは「いろいろなことのほんとうの意味」を理解しなくてはならない。

今回通観した三誌を含め、戦後まもなく創刊した児童雑誌は一九五一年には全て廃刊になってしまう。その理由の一つとして、私は、これらの雑誌が育てようとした主体的な子どもたちが、読者として「おもしろくない」という意見を編集部に寄せ始めたという皮肉な展開の中で、おもしろいこととためになることを相容れないものとして両天秤にかけてしまったことで、編集内容が変質しアイデンティティを失ったと分析している。ただ、社会全体に外的要因があったことも又事実である^⑩。

寿命も短かったこれらの雑誌は、現時点から見れば至らない点を

指摘することはできる。しかし、子どもたちを未来の社会の担い手として捉え、政治や経済や世界の動きをも正面から解くメディアの存在価値は今もあるのではないか。ほんとうのことを教えると、各界の専門家に原稿依頼した「良心的児童雑誌」の気概は、専門家の歴史的蓄積のある情報と、門外漢の匿名で無責任な書き込みが同列に並んでしまうネット環境が影響力を持つ今日、改めてその存在価値を教えてくれる気がする。

また、男女共学や、民主主義、選挙など「新しい」制度や概念をわかりやすく伝えようとする記事や、子どもたちの声を取りあげた記事も多数見られるので、さまざまな観点で戦後の児童雑誌を読み返すことも続けていきたい。

注

(1) 本稿を書き始めたとき「あいちトリエンナレ2019」の「表現の不自由展・その後」の中止が念頭にあったが、提出期限直前の今、世間を騒がせているのは小学館の『週刊ポスト』の韓国ヘイト特集である。歴史に刻まれる醜悪さの中に今私たちは生きている。

(2) 二〇〇五年、日本の絵本作家の呼びかけで始まり、日本、韓国、中国の絵本作家それぞれ四人が一冊ずつ戦争と平和をテーマにした絵本を創り、それぞれの言語で翻訳出版するというプロジェクト。日本の版元は童心社であるが、韓国の作家クォン・ユンドクが従軍慰安婦をテーマ書いた作品の出版を断念。浜田桂子、田島征三ら関係者の苦勞の末、二〇一八年四月に「ころから」より『花ばあば』として出版された。

(3) 本稿では今の日本のあり方を照射するために、手始めに中国、朝鮮に絞って記事を追うが、その際、国名も定まらない過渡期を対象とするため、「東アジア」という地域名で指すことにする。

- (4) 菅忠道『日本の児童文学Ⅰ総論 増補改訂版』大月書店、一九五六年四月初版、一九六六年五月増補改訂版第一刷発行、三五一頁
- (5) 私は、「水島は帰ってこなかった」「ビルマの竖琴」生成考」(『季刊児童文学批評』再刊一号、一九八七年七月)で、本作をめぐる諸問題をまとめている。今回、ビルマの日本兵の作品が広く読まれ、中国、朝鮮の戦線が書かれなかったことの意味を考える必要に気づかされた。
- (6) 「赤とんぼ」二巻八号(一九四七年八月)の「皆さんとお話する頁」で、藤田圭雄は「内容はもちろん、形式の上でも、左横組という思い切った進歩的な姿勢で出発した『銀河』が、とうとう普通の縦組に変ってしまった。残念なことである。」と手厳しく批判しつつエールを送っている。藤田はこの欄で再三他誌に言及している。他誌の編集後記にも他誌への言及は見られる。当時の作り手たちに見童文化運動の意識が強かったことがここからもうかがわれる。
- (7) 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』第二巻、大日本図書、一九九三年、五三〇頁
- (8) 小言幸兵衛「後悔先に立つ」(『赤とんぼ』二巻一号)に記載あり。
- (9) 「長編童話『黄浦江の流れ』を『銀河』に連載しはじめた。軍隊生活ですごした上海を舞台にしたものであった。しかし、第二回目を九月号に発表とともに、同誌もついに終刊となり、待望の長編童話はついに中断となった。」水藤春夫・前川康男編「岡本良雄年譜」『岡本良雄童話文学全集 第三巻』講談社、一九六四年八月
- (10) 「ここに一九五〇年にはじまるレッドページなどでは、たとえば東北地方では、『広場』などを生徒によましたということが理由のひとつにかざえられて職場をおわれた教師などもあつたくらいで、この雑誌は「アカ」の名で占領軍当局からも排撃された。」来栖良夫「『広場』の創刊から廃刊まで」『新選日本児童文学3現代編』三五四頁

参考文献

- ・鳥越信等編『新選日本児童文学3現代編』小峰書店、一九五九年四月第一刷、一九七九年四月第一三刷発行
- ・『復刻版赤とんぼ』大空社、二〇一〇年二月
- ・日中韓3国共通歴史教材委員会編著『未来をひらく歴史 第2版 東アジア3国の近現代史』高文研、第二版第一刷二〇〇六年七月
- ・『文部省著作 国語教科書』大空社、一九八四年五月

East Asia Depicted in Children's Magazines Following World War II

NISHIYAMA Rika

From 1946 to 1951, many children's magazines were published. They tried to provide a wide range of information to children who became the bearers of the new democratic nation Japan after WWII. The author read through three representative magazines and collected and analyzed articles on East Asian countries and regions. As a result, it turns out that the main focus was to convey positive impressions of things and people without any introspection or consideration of Japanese persecution or colonial rule. It will be necessary to follow changes in the image of East Asia provided to children.

Keywords: children, postwar, magazine, East Asia, children's literature
